

【書評】 星紀市編

『砂川闘争50年 それぞれの思い』
胸が熱くなる砂川闘争の記録

道場 親信

今年「砂川闘争」の名で知られる米軍立川基地拡張反対闘争の始まりから五〇年目にあたる。その五〇年目を記念して、砂川闘争に参加した方々の回想がこのたび一冊の本にまとめられた。

一九五五年五月、当選したばかりの砂川町長宮崎伝左衛門氏に対して特別調達庁（現在の防衛施設庁）の係官は、米軍基地拡張のために同町の中央に位置する地域に大がかりな農地接収を行なう計画を申し入れた。現地の農民はただちに基地拡張反対同盟を結成し、抵抗に立ち上がる。一年目の外郭測量阻止闘争、地元農民だけで闘った私有地に対する強制測量阻止闘争と「煙幕作戦」「黄金作戦」などの創意にみちた抵抗、そして二年目の秋、一〇月の「流血の砂川」。ここで政府は拡張予定地の測量中止を表明し、地元は勝利を勝ち取った。

だが闘争はこれで終わりではなかった。翌年六・七月には、占領下で接収された土地の強制使用の継続に反対する基地内測量阻止闘争が行なわれ、このとき基地内に立ち入った労働者・学生が罪に問わ

れた裁判で安保条約違憲につき無罪、という「伊達判決」が下されている（本誌前号参照）。六〇年代には土地の強制収用をめぐる東京都収用委員会での抵抗をはじめとした法廷・行政闘争が「地味」に続けられたが、六七年の美濃部都政誕生以後収用委員会の審理が停止、最終的に六八年一二月、米軍は基地拡張計画の中止を声明し、日本政府も収用認定を取り下げる、という結末を迎えた。

本書はこの約一五年にわたる砂川闘争に関わった人びとの回想を映像記録し、先に『砂川の熱い日』（二〇〇二年）というビデオ作品にまとめた星紀市さん——星さんは九六年にも『写真集 砂川闘争の記録』というすばらしい写真集を編集されている——が、ビデオに使用しなかった分も含め回想を文章化し、さらに新たに発掘された反対同盟の闘争日録、さらには本会の吉川勇一氏が当時書いた「日記」も含めて一書となしたものである。

回想を残している人びとの多くは、「流血の砂川」に支援者としてかけつけ



た元学生連の学生や労働者であるが、宮崎町長や反対同盟幹部の

家族の方からの証言もさまざま寄せられている。残念なのは、五五〜六年の「町ぐるみ」の闘いに参加した地元の方の声が少ないことである。これはすでに亡くなった方が多いということもあるが、それ以後土地を売却して反対同盟をやめた方からはお話をうかがうことができなかった、という事情にもよるといえる。あの闘争が現地の人びとに何を残したのか、「ゼンガクレン」や労働組合の赤旗に初めて出合い、ともにスクラムを組んだ記憶、そして「勝った」という全身の喜びはどこへつながっていったのか。そのことにとっても心を惹かれる。支援者の声は「激突」のその時の記憶に集中するのは当然のことであるが、その後を生きた人たちが、生きる上でなした選択ゆえに「声」を発することができない別れを経験することは、私に複雑な思いを残す。

五〇年ぶりの回想ということもあり、「今だから話せる」話題が満載の本書は、読み進むごとに当時の感触をありありと浮かび上がらせる生き生きとした証言にあふれていて、一気に読んでしまった。

その一つ一つについて語りたいことは多いが、ここでは展開できない。本の作りも丁寧で、編者星さんの、「砂川闘争」に対する熱い思いが伝わってきて読む側も胸が熱くなる一冊である。軍事基地

（14ページ下段に続く）

その通りで、ばくも『朝日』だけでは全然足りず、『朝日』が一番載ってないんじゃないかな)、いっそのこと沖タイや新報を取ろうかなと思っっているくらいです。

一方で、共同通信などもっと色いろと配信すれば(全国紙は国内情報は共同を脱退していると思いますが)、もう少し内地の人びとが関心を持ち、我がこととして兵力と平和について考えるようになるのではないかと感じています。

新崎さんには、ヤマトのメディアの扱いに関する批判もうかがいたいと思います。また、西山太吉の今度の国家機密に対する訴訟、そして沖繩にとつての意味を、論じていただけると助かります。

(答3) 沖繩情報に落差があるのは、ある意味で当然だと思えます。問題は、「日米同盟 未来のための変革と再編」という、日米同盟の恐るべき変質の問題を、単なる在日米軍再編協議の中間報告と捉え、沖繩の負担軽減と抑止力のバランスに切り縮めてしまふところにあるのではないのでしょうか。西山太吉裁判についても同じことがいえます。これは沖繩返還協定にかかわる問題ですが、沖繩問題ではなく、外交上の密約問題を情報漏えい・国家公務員法違反の問題にすりかえられると腰が引けてしまった日本のマスコミの体質の問題だと思えます。それは、NHKの番組に対する政治家の圧力

問題を報じた朝日新聞の態度がふらついていることと合い通じているのではないのでしょうか。

〈辺野古の闘争の基礎にあるもの〉

(問4) 辺野古の闘争はずいぶん長く続けられています。現在の状況はどうなのでしょう。その持続の強さのエネルギーの根源はどこにあるのでしょうか。今後の見通しと、今私たちはどういう連帯の行動が求められているのでしょうか。

(答4) わたしは辺野古の闘いを、「個の志の集合体による徹底的非暴力実力闘争」と規定しています。現場の闘いの参加者は、組織や団体の動員によるものではなく、すべて個人で、それぞれが自分の健康状態や生活条件に合わせて日数や時間を決めて参加しています。半ば偶然この闘いに参加して生き方が変わった人もいれば、ミニコミでその体験記を読んだ参加した人もいます。この闘いの背後には、統計的数字の上ではコンマ以下の人たちの目に見えない繋がりがありません。その広がり、沖繩をはるかに越えていました。在日朝鮮人の参加もありました。この闘いを経済的に支えたのも、すべて個人カンパです。現場の、とくに過酷な海上闘争の参加者は限られていました。その闘いは、新基地建設反対の世論を広め、強めていきました。そ

うした世論の監視が、調査強行をためらわせた面もあると思います。ただ今後は、アメリカ側に釘を刺されていることもあって、日本政府は、より強硬な姿勢で臨んでくるでしょう。そうした見通しの中で、皆さんがどのような行動をするのか、それは皆さんが主体的に決めていただくことです。

(なお、わたしたちが出している季刊の小冊子『けーし風』は、辺野古の闘いに参加している人たちの肉声を伝える努力をしています。関心のある方はお読みください。送料込み500円。申し込み先 FAX098-832-8484)

(あらさき・もりてる、沖繩平和市民連絡会代表世話人、前沖繩大学学長)

(33ページより続く。書評)

の拡張を進める国家の暴力に対し、非暴力直接行動で立ち向かった反対同盟、妙法寺のお坊さん、支援者たちの創意と誠意は、軍事基地と闘い国家の暴力と対峙する現在そして未来の人びとに開かれた経験としてある。ぜひとも手にとつて読んでいただきたい。

星紀市編『砂川闘争50年 それぞれの思い』けやき出版、05年10月刊 1800円 十税

(みちば・ちかのぶ、社会運動史研究)